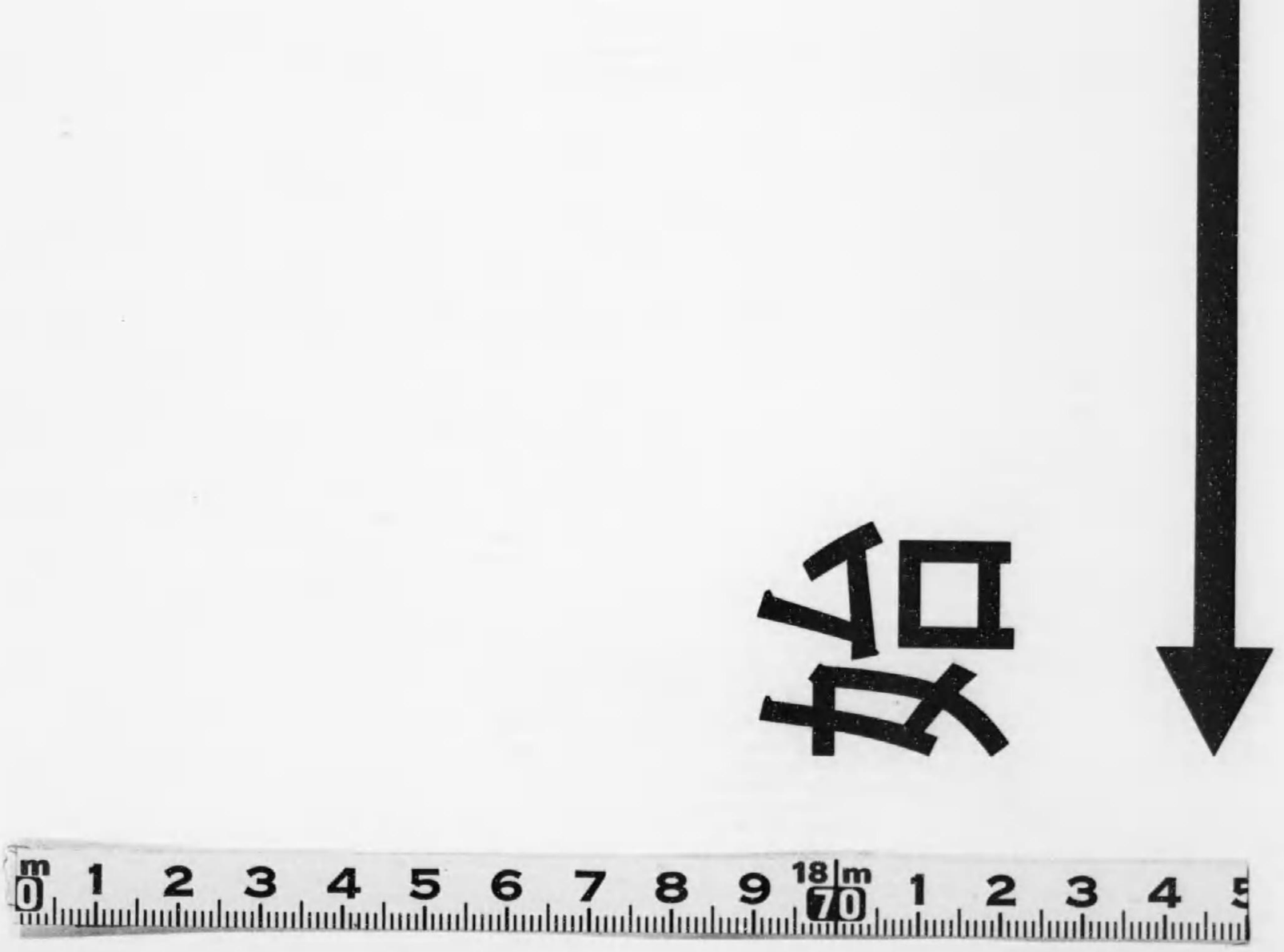
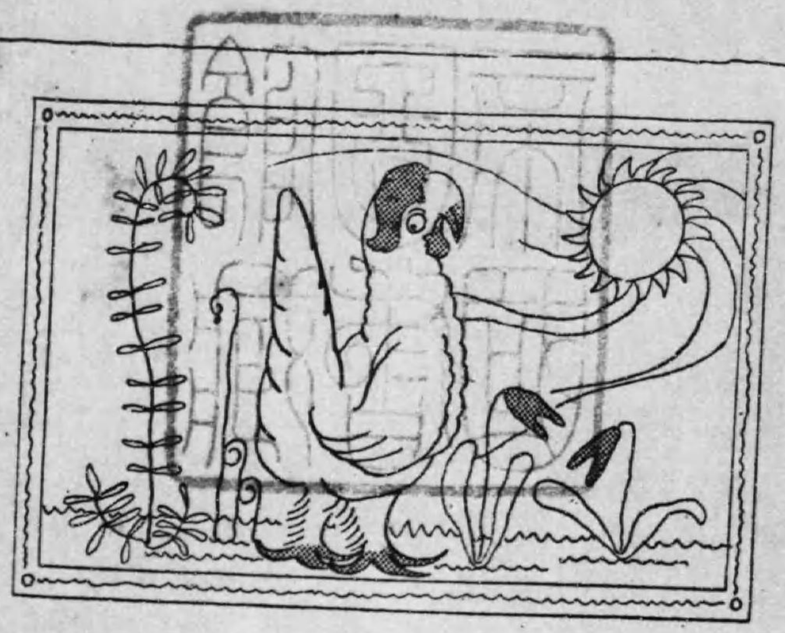

505
8

18-8



童話新集

笛吹少年

若月賢著

童謠

二つの林檎

しけを作

林のなかの
りんごを喰べて
ムズ〳〵のび出す
鼻の上。

ぴよん〳〵踊るは
三人の子供。
大馬鹿小馬鹿と
唄つて踊る。

大正
12.8 20
内交

二つの林檎

目次

1 天狗の娘（頁一）
2 不思議な鍵（挿畫）（頁一一）
3 お芋のダンス（挿畫）（頁二一）
4 チルチルさん（頁三一）
5 駒鳥の巣（挿畫）頁四三）
6 太陽の望み（頁五三）
7 玩具の戰爭（挿畫）（頁六一）
8 お尻の肉（頁七三）
9 二つの林檎（口繪）頁八三）

童話新集笛吹少年

若月賢著

一　天狗の娘

天狗と云ふものは、人間の心を悟るものだとか申します。

高野山の小田原町に太助と云ふ、指物屋がありました

が、ある日の事いつもの通りに仕事場へ出て、仕事に取

目次

10 鰒の願ひ（挿畫）（頁九五）
11 恩知らずの兎（頁一〇三）
12 おかしな盲目（挿畫）頁一一一）
13 犬の鼻（頁一二三）
14 笛吹少年（挿畫）頁一三一）

りかゝろうとしますと、十二の女の子が、何處から來ましたか、太助の仕事を邪魔して仕樣がありませんでした。

『これ〳〵、惡戯をしてはいけないよ、あつちへゆきなさい』

と、云つても聞きません。

そしては、また太助の仕事の邪魔をいたします。

太助は困つてしまつて、

『よし〳〵、そんなら一つ脅してやろう』

と、思ひましたから、そつと手斧を握りました。

すると女の子はちやんと知つてゐて、

『駄目だよ、手斧で脅かさうたつて、驚きませんよ』

と、平氣でありました。

太助は呆れて、

『よし〳〵、そんならこんどは知れない樣にして』

と、金槌をとりました。

すると、また女の子は、

『だめ〳〵、金槌なんか恐くないよ』

と、笑つてゐました。

太助はすつかり怒つてしまひました。

けれども女の子は平氣で、惡戯をやつて居りました。

『そんなに云ふ事を聞かないと、殺してしまふよ』

と、太助は本當に殺しかねない勢で、鋸を振り上げました。

すると女の子は、恐い顏をして、

『駄目〳〵、お前さんが何をしやうと、私はちやんと知つてゐるんだから……』

と、云ひました、

太助はホト〳〵困つてしまひました。

處が何うした事ですか、突然、傍に積んでありました

拵へたての火鉢が、ガラ〳〵と崩れ落ちました。

『あッ』

と、云ふ間に女の子の顏へ、ぶつかつたかと思ふと、女の子の姿は變つて、天狗になりました。

天狗はひどく鼻をうちつけて、驚いて逃げて行きました。

これを見ました太助は顏の色を變へて、

『サア、大變な事になつたぞ、あれは天狗だ、どんな仕返しをされないともかぎらない』

と、慌てゝ家へ歸つて、ブル〳〵ふるえてゐました。

すると、こちらは女の子に化げた天狗であります。
山の奥の自分の巣へ逃げ歸ると。
『おゝい、皆な集つてくれ』
と、仲間を呼び集めました。
『何うした、お前の鼻の先は、皮がむけて眞赤な血が、ダラ〳〵と流れてゐるぢやないか』
『さあ、その事だ』
と、天狗は顔をしかめて、痛さを怺え乍ら
『あの太助と云ふ奴は、弱虫だと思つてゐたが、えらい仕掛がしてあるんだ、人間なんて恐しいものだぜ』

と、一伍一什の話しをいたしました。
『成程、それは口惜しかつたろう』
『何とかして敵をとらにやなるまい』
『併し、またどんな仕掛がしてあつて、どんな目にあふか判らないから、うつかり傍へ行けないよ』
『そりやさうだな』
『併し、本當にこの儘にして置いては、天狗連中の名折れだ、いゝ方法はあるまいか』
と、高い鼻をつきあはせて、いろ〳〵と相談いたしましたが、ナカ〳〵いゝ智慧が出ませんでした。

すると女の子に化けた天狗が、ぽんと膝を叩いて、

『うむ、いゝ事があるゝ』

と、申しましたので、一同はキヨロついた眼で、その天狗を見て、

『どんな事だ、早く云ひなよ』

と、せき立てました。

『俺の考へでは、あの太助の家もこの山も、全部燒いてしまつた方が、いゝと思ふよ』

と、申しました。

すると一同が手を叩いて、

『成程、成程』

『そりやいゝ考へだ』

『では、早速、さうしやう』

と、相談がきまつて、別れました。

こゝに非常に豪い坊さんがゐて、ちやんと天狗たちの相談を、聞いてしまひました。

『これは大變な事だ、では私も天狗になつて』

と、すぐ天狗に化けてしまひました。

その夜案の條、天狗たちは山へ火をつけました。

けれどその度に坊さんの天狗が飛んで行つて、黑い砂

をまいて、消してしまひました。

その爲めに天狗たちはあきらめてしまつて、それは中止する事になりました。

そのおかげで太助も山も、燒かれないで助かりました。

と、坊さんのすんでゐたお寺は、誰もすむものがなくなつて、天狗のすみかになつたと云ふ噂でありましたとさ。

二　不思議な鍵

トルコのある村に、ヂミと云ふ少年がありました。

この少年の家は大變貧しくつて、いゝ着物をきた事がなく、いつも汚ない破れた服と、ボロ靴ばかり、きたりはいたりして居りました。

ヂミは村一番の親孝行者で、隣村まで評判でありました。

ヂミはお母さんを養ふ爲め、自分の生活の爲め、他の

子供の樣に遊んでは居られませんでした。

ですから、村の人の使ひ歩きをしたり、お手傳をしたりして、お禮に貰つたお金で、その日〳〵をやつとの事で暮してゐる程でありました。

ある日、庄屋の旦那に頼まれて、町へパンを買ひに行きました。

日暮れではありましたが、急ぐと云はれたので、疲れた足を曳ずり乍ら、町へ行つてパンを買ひました。

そして袋に入れて、ウンとこ〳〵と、かついで來ました。最う日は暮れて、星がキラ〳〵空にまばたいて居り

ました。

丁度森かげまで來ますと、一人の婆さんがお腹をいためて、大變苦しんで居りました。

『もし〳〵ヂミさん、何うか助けて下さい』

と、申しました。

ヂミは大變親切者でしたから、氣の毒に思つてパンの袋を傍に置いて、頻りとお婆さんの介抱をしてやりました。

けれどもナカ〳〵なほりさうにも思はれませんでしたので、ヂミが心配して、

露光量違いの為重複撮影

『お婆さん、藥を買つて來て上げませうか』

『有難う、さうして頂けば助ります。私はお前さんが急ぎの用で村へ歸ると云ふ事を知つてゐましたから、賴みませんでしたが、それでは何うかお願ひいたします』

と、お金を渡しました。

ヂミは疲れた足で、我慢して町へ引き返して、藥を買つて來て、お婆さんに飲ませましたので、漸くお婆さんの苦しみはとれました。

お婆さんは大變喜んで、

『有難う〳〵……何もお禮に上げるものはありません

童謡

不思議な鍵

しけを作

一つのパンが
豆になり
二つの藥が
鍵となる。
つる〳〵生えた、
豆の木に、
貰つた鍵で、
金儲け。

露光量違いの為重複撮影

『お婆さん、藥を買つて來て上げませうか』

『有難う、さうして頂けば助ります。私はお前さんが急ぎの用で村へ歸ると云ふ事を知つてゐましたから、賴みませんでしたが、それでは何うかお願ひいたします』

と、お金を渡しました。

ヂミは疲れた足で、我慢して町へ引き返して、藥を買つて來て、お婆さんに飲ませましたので、漸くお婆さんの苦しみはとれました。

お婆さんは大變喜んで、

『有難う〳〵……何もお禮に上げるものはありません

童謠

不思議な鍵

しけを作

一つのパンが
豆になり
二つの藥が
鍵となる。
つる〳〵生えた、
豆の木に、
貰つた鍵で、
金儲け。

が、この鍵を上げませう、この鍵を持つて被在ればキツといゝ運が向いて來ますよ』

と、申しましたので、ヂミは喜んでその鍵を貰ひました。

小さな銀の鍵でありましたが、ポケツトのなかへ入れて、お婆さんに別れ、大變おそくなりましたから、急いで村へと歸つて來ました。

また村の橋の處へ來ますと、汚ない乞食がお腹をすかして寢てゐました。

『ヂミさん、何うか私を助けて下さいまし』

『何うしたんですか』

と聞きました。

『私は三日も御飯を喰べないので、今にも死にさうなんです』

『そりや大變ですね』

『後生ですから、河の水でもいゝから、飲まして下さいな』

と、頼みましたから、チミは可哀相になつて、パンの袋を傍へ置いて、お椀を持つて河の水を汲んで來ました。

乞食は口をモグ〳〵させてゐましたが、嬉しさうにチミが持つて來てくれた、河の水を飲みました。

『チミさん、有難う、これで本當に生きかへつた樣な氣持ちになりました』

と、乞食は頭をペコ〳〵下げてお禮を云ひました。

チミはパンの袋をかついで歸ろうとしましたが、袋の口が開いてゐましたので、不審がつてのぞきました。

『チミさん、お前さんに默つてパンを一つ喰べましたよあまりお腹がすいてゐたものだから、ね、惡いと思ひ乍ら一つ食べましたよ、その代りお禮にこれを上げませう家へ持つて歸つて、蒔いてごらんなさい、キツとあなたにいゝ運が向いて來ますよ』

と、乞食は唯一粒の豆をくれました。

自分のパンでないので困つたと思ひましたが、仕方がありませんから、パンの代りに豆を一粒貰つて歸りました。

庄屋は大變怒りました。

『パンと豆と代へる奴があるか、こんなにおそいのはキツと、お前が道でパンを喰べてゐたのだろう、今日の使賃はやらないよ』

と、云はれてヂミはしほ〳〵して歸りました。

そして早速、豆を蒔きました。

翌朝起きて見ると、その豆の木が空までのびてゐました。

ヂミは驚いて豆の木にのぼつて、天國へ行きました。

すると立派なお城がありました。

『おや、このお城はナカ〳〵開かないが、何うしたらいだろう』

と、思案をしました。

フトお婆さんから貰ひました、小さい銀の鍵を出して門の戸の、鍵の穴へ入れますと、ひとりでカチリと云つて、門は八文字に開きました。

ヂミはびつくりしてソロ〳〵なかへ入つて見ました。
すると金や銀の寶物が一杯ありました。
ヂミは喜んでそれをみんな家へ持つて來て、お金にかへましたので、一時に國一番の大金持ちになりました。
そしてお母さんと二人で、樂しく幸福な日を送つてゐました。
ヂミはそれでも毎日働いてゐましたとさ。

三　お芋のダンス

角を曲つて三軒目に芋屋がありました。
芋屋の小父さんは、いつもぶう〳〵云つてゐました。
をばさんは優しい人で、また親切な心持ちを持つた人でありました。
をばさんがお芋を燒く時は、釜のなかへ生芋をならべながら、
『芋さん、芋さん、つらかろうが、辛棒しておくれ、な

露光量違いの為重複撮影

るべく熱くない様に、火を焚くから……』

と、申します。

小父さんは情け要捨はありませんから、釜のなかへドン〳〵投げ込んで、

『焼けろ〳〵、早く焼けろ、早く焼ければ、ドン〳〵火を燃すぞ』

と、怒鳴りつけます。

小母さんは釜の下へ少しづゝ火を入れながら、

『辛棒しておくれ、芋さん、あつかろうが辛棒しておくれ』

童謡

お芋のダンス

しけを作

角を曲つて
三軒目、
芋尾の小父さん、
なぜおとる。
釜のお芋が、
泣き出して、
熱つあつゝと、
踊つてる。

露光量違いの為重複撮影

るべく熱くない様に、火を焚くから……』

と、申します。

小父さんは情け要捨はありませんから、釜のなかへドン〳〵投げ込んで、

『焼けろ〳〵、早く焼けろ、早く焼けねば、ドン〳〵火を燃すぞ』

と、怒鳴りつけます。

小母さんは釜の下へ少しづゝ火を入れながら、

『辛棒しておくれ、芋さん、あつかろうが辛棒しておくれ』

童謡

お芋のダンス

しげを作

角を曲つて
三軒目、
芋尾の小父さん、
なぜおこる。
釜のお芋が、
泣き出して、
熱つあつゝと、
踊つてる。

と、だん〳〵に薪をくべました。

小父さんは、ぶり〳〵して、

『なんで早く燒けないんだろう、本當に癪にさはる芋だな、これでもか、これでもか』

と、ドン〳〵薪を投げ込みます。

小母さんの方は、時間はかゝりますけれど、ホンがりとおいしく出來ます。

小父さんの方は、表皮は眞黑焦けで、なかはまだ燒けないでゐます。

ですから、小父さんの燒いたお芋は誰も買ひ手がありお芋のダンス

ません。

小母さんがお芋を燒くと、お客さんがドシ〳〵やつて來ます。

『おくんなさいな』

『いらしやい……』

と、云ひながら小父さんが出て來ると、お客はいつもその儘、默つて、お芋を買はずに出て行きます。

『何んだい、馬鹿にしやがつて』

と、小父さんはブリ〳〵怒ります。

『おくんなさい』

と、お客が來た時、

『おや、よく被來いました』

と、小母さんがニコ〳〵笑つて出て來ると、お客は澤山買つて行きます。

道を歩いてゐる人でも、買ふ氣かない人でも買つて行きます。

遂にはお客がお店をのぞいて、

『今日は誰だ』

『をばさんか、をぢさんか』

『をばさんだよ』

『それ買つて行け』

と、どやノ〳〵と入つて來て、押すな〳〵と云ふ騒ぎであります。

『今日はをぢさんだよ』

と、云ふと、

『いけない〳〵、早く逃げろ』

と、山程のお客でも、皆なバラ〳〵逃げて行きます。

をぢさんは大變怒つてしまつて、

『お前が家にゐるから、私がお芋を賣ろうと思つても、誰も買つてくれないのだ』

をばさんはとう〳〵、お芋屋を追ひ出されてしまひました。

『本當に、いま〳〵しい奴等だ』

小父さんはヤケになつて、大きな庖刀でズバリ〳〵とお芋をきつては、釜のなかへ投げ込みました。

驚いたのは釜のなかのお芋です。

『あツ、痛い……』

『わツ、頭をぶつけた』

『俺はお尻を斬られたツ』

『や、君の顔は半分だね』

『ウン、あの小父さんが、大きな庖刀で、やけに斬つたんだよ』

と、釜のなかで押しあひ、ひしあひして、互に泣き出しさうな顔してゐました。

すると、小父さんが怒り聲で、

『釜のなかの芋共、早く燒けろ、燒けねばドン〳〵火をもすぞ』

と、云ひましたので、

『サア、大變だ、またいち惡るが火をつよくするとさ』

『困つたね、また身体が眞黒焦げになるのか』

『それより、つらいのは、燒かれる間だよ』

と、お互に話しあつてゐました。

するとだん〳〵お釜があつくなつて來ましたので、

『あツ痛いぞ』

『痛いんぢやない、あついんだ』

『お、こりやたまらぬ』

と、ひとりのお芋が飛び上りました。

『やツ、助けてくれ』

『あつい〳〵』

『死にさうだ』

と、泣きながら、お芋たちは釜のなかを刎ね廻つて歩きました。

まるでダンスをやつてゐる樣でした。

けれども小父さんはどん〳〵火をくべますので、しまひに釜が眞赤になつて、お芋は眞黑焦げになつてしまひました。

小母さんがゐなくなつてから、お芋屋へは誰一人お客が來なくなりました。

四　チルチルさん

スイツツルのある山麓に、トミーと云ふ貧乏な百姓が住んで居りました。

何しろ子供が澤山ありますので、いくら働いてもお金がたまりません。

ですからいつも、

『お金がほしいな、お金を誰かくれないかな』

と、口ぐせの樣に云つて居りました。

ある日の事、大變お天氣がいゝので、山へ薪を拾ひに出かけて行きました。

トミーは思つたより澤山な薪を拾ひましたから、

『どれ〳〵、一休みしてから、歸る事にしやう』

と、木の根に腰をおろして、パクリ〳〵と煙草をふかして居りました。

すると、この木の裏の方に、大きな洞穴がありましたが、そのなかゝら大きな〳〵蛇が出て來ました。

トミーは腰を拔かさんばかりに驚いて、

『何うか命ばかりは助けて下さいまし』

と、ぶる〳〵ふるえてゐました。

すると蛇は靜かに近よつて、

『私は決して害を加へる爲めに來たのぢやありません、あなたがお金をほしがるから、上げ樣と思つて來ましたのです』

と、申しました。

トミーはほつと一安心して、

『それは〳〵、有難うございます』

と、お禮を申しました。

『その代りあなたの一番下の妹さんを下さい』

『承知しました』

と、別れました。

蛇に娘をやるのは厭ですけれど、お金をくれると申しましたから、トミーは娘のチルチルを連れて、習日また洞穴の處へ行きました。

蛇は約束通り澤山お金の入つてゐる袋を、五つも六つも持つて出て來ました。

『蛇さん、お約束ですから、娘のチルチルを連れて來ました』

『ではお金を上げませう』

と、トミーは蛇に、娘を渡して、お金を貰つて歸りました。

そしてそのお金で美しい着物を買つたり、きれいな家を建てたりして、幸福な日を送りました。

けれども、トミーは時々思ひ出しては、

『本當にチルチルは可哀相な事をした』

と、涙を流してゐました。

けれどもチルチルは決して不幸ではありませんでした。大蛇だと思つてゐましたら、それは美しいお母さんになつてゐまして、チルチルを大變可愛がつてくれました

そして、美しい着物や指輪や、腕輪、何んでもチルチルのほしがるものを買つてくれました。

ある日、この國の王様が狩においでになつて、日が暮れましたから、この蛇のお母さんの家へ泊りました。

お母さんとチルチルは大變喜んで、王様をもてなしました。

王様はチルチルを見て、

『何うか、この美しい娘さんを、私のお嫁さんに下さいな』

と、お母さんに頼みました。

お母さんは喜んで、チルチルにもつと美しい支度をして、王様のお嫁さんにやりました。

處がこんなに可愛がられても、世話になつてもチルチルはお禮を一度も申しません。

蛇のお母さんは怒つてしまつて、

『今に氣のつく樣に、困らせてやろう』

と、蛇のお母さんは魔法をつかひました。

王様は何の氣なしに、チルチルの顏を見ますと、山羊の顏になつてゐて、チルチルの頭には二本の角が生え、顎にモヂヤ〳〵鬚が澤山生えてゐました。

王様は驚いて侍女をつけて、チルチルを塔の上に入れて、

『この糸を二日のうちにつないで置きなさい』

と、申しつけました。

『馬鹿々々しい、私は王様のお嫁さんだのに、こんな糸なんかつながなくつてもいゝ』

と、窓から外へ投げ出しました。

するとその日になつて、チルチルはやつぱり氣になりますから、そつと塔を脱け出して、蛇のお母さんの處へやつて來ました。

そして、その事情を話しますと、お母さんは可哀相になつて、立派な絹糸を澤山くれましたから、チルチルはそれを持つて王様の處へ歸りました。

『こんどはこの犬を立派に育てなさい』

と、小さい犬の子を渡されました。

チルチルはまた怒つてしまつて、犬の子を窓から投げ出しました。

やつぱり王様が犬の子を取りに被來る日が來ましたので、またチルチルは蛇のお母さんの處へ來ました。

すると門の處へお爺さんが立つてゐました。

『チルチルさん、お前さんはお母さんがどんなに親切にして下すつてもお禮を云はないから、いつまでたつても王様の傍へ行かれませんよ、ごらんなさい、あなたは山羊に似てゐますよ』

と、鏡を出されました。

『そんな馬鹿な事があるもんですか』

と、チルチルは鏡のなかをのぞいて見ました。

成程角が二本出てゐます。髯も生えてゐます。

『あゝ、何うしやう……』

と、チルチルは悲しくなつて泣きました。

『お前さんはお禮を云ふ事を知らないから、お母さんが怒つて山羊にしてしまつたのです』

と、お爺さんが聞かせました。

『あゝ、私が悪うございました』

始めて氣がつきましたから、

『それではお母さんに、お詫びいたしませう』

と、奥へ入つてお母さんに、泣きながら、今までの我儘や、お禮を云はなかつた事を、お詫びいたしました。

お母さんはニコ〳〵して、

『おゝ、よく氣がつきましたね、私はお禮を云つて貰ひ

たくつて世語をしたわけぢやありませんよ、これから一國の王樣のお嫁さんになを以上は、禮儀を知つてゐないと、家來に馬鹿にされるから、氣がつく樣にさうしたのです』

お母さんは早速もとの、美しいチルチルにしてやりましたので、王樣も喜んでチルチルを可愛がつてやりましたとさ。

五　駒鳥の巣

青い花が咲いて、涼しい風が吹いて、そして夏が逝きました。

美ちやんは毎日大人しくお母さんと、その日を送つて居りました。

『美ちやん、お前、姉さんの顏を知つてゐますか』

ある日、お母さんがお人形ごつこをして遊んでゐた、美ちやんに聞きました。

『あら、お母さん、私に姉さんがあるの』
『えゝ、ありますとも』
『どんな方でせう、私忘えがありませんわ』
と、美ちゃんは考へ〳〵云ひました。
『知らない筈はないんですがね』
と、お母さんはお針をしながら云ひました。
『だつて、私、判らないわ』
『姉さんは、大變美ちゃんを可愛いがつて下すつたのですよ』
『さう』

美ちゃんはニツコリ笑ひました。
『そして、姉さんて方はどんな方』
『それは〳〵本當にやさしい人でしたよ』
『今、何處に被在るの』
『遠い〳〵、外國にゐるのです』
『唯一人で』
『いえ、お父さんと御一緒なんです』
『何うして、お父さんと姉さんばかり、外國へ行つたんでせうね』
『それはお父さんが、天子樣の御用で外國へおいでにな

露光量違いの為重複撮影

つてゐるのです』

『姉さんは』

『あちらの學問を勉强してゐるのです』

『そして、お父さんや姉さんは、いつ歸つていらしやるのでせう』

と、美ちやんは聞きました。

『さうですね、いつ歸つて被來るのか、まだ判りませんけれど、ちき最う歸つて被來るでせう』

『私、早くお父さんや姉さんに逢ひたいわ』

それから美ちやんは毎日〳〵、姉さんの事を思つてゐ

童謡

駒鳥の巣

しけを作

可愛い駒鳥
巣をつくれ、
お前の家が
出來たなら、
遠いお國の
姉さんが
私のとこへ、
歸ります。

露光量違いの為重複撮影

つてゐるのです』

『姉さんは』

『あちらの學問を勉强してゐるのです』

『そして、お父さんや姉さんは、いつ歸つていらしやるのでせう』

と、美ちやんは聞きました。

『さうですね、いつ歸つて被來るのか、まだ判りませんけれど、ちき最う歸つて被來るでせう』

『私、早くお父さんや姉さんに逢ひたいわ』

それから美ちやんは毎日〳〵、姉さんの事を思つてゐ

童謠

駒鳥の巣

しけを作

可愛い駒鳥
巣をつくれ、
お前の家が
出來たなら、
遠いお國の
姉さんが
私のとこへ、
歸ります。

ました。

ある日の朝、美ちゃんは床から出ると、すぐお母さん處へ飛んで來ました。

『お母さん、姉さんが歸つて被來るわ』

『あら、何うして判つたの』

お母さんは不思議さうに聞きました。

『昨夜、夢を見たのよ』

『ほゝゝゝ、夢で判るのですか』

『だつてね、美しい女の人が來てね、私は美ちゃんの姉さんよと、云ひましたわ』

『ほゝゝゝ、そして何うしたの』

『あのね、駒鳥が巣をつくる頃、歸つて來るつて仰有つたわ』

『まア……』

『お母さん、駒鳥つて鳥は、いつ頃巣をつくるんでせうね』

『さア、お母さんには判りませんね』

『ちや、私、駒鳥に聞いて見ますわ』

『成程、それはいゝ處に氣がつきましたね』

『だから、駒馬を買つて頂戴な』

『はい〳〵、買つて上げますとも……』

お母さんはニコ〳〵しながら、その日、美ちやんを連れて、鳥屋へ行きました。

そして嘴の眞赤な可愛い小鳥を一羽買つて來ました。

美ちやんは早速、お菓子をやつて、

『駒鳥さん……駒鳥さん、あなたはいつ巣をつくるのですか』

と、美ちやんは訊きました。

駒鳥は可愛らしい小首をかしげてゐましたが、何んとも返事をしないで、美しい聲で啼きました。

『お母さん、駒鳥はいくら聞いても、教へてくれませんわ』

と、美ちやんは泣き出しさうに云ひました。

お母さんは考へてゐましたが、

『そんな事はないでせう、よく聞いてごらんなさい』

と、仰有いました。

美ちやんはお母さんから頂いた、おいしいカステラを持つて、駒鳥の處へ行きました。

『本當に駒鳥さん、教へて頂戴よ、姉さんはいつ歸つて被來るの』

すると、駒鳥は美しい聲で唄ひました。

『私一人ぢや巣はつくれませんよ』

『何うしてなの、お前が巣をつくつてくれなければ、姉さんが歸つて來て下さらないわ』

『でも、私一人ではつくれませんよ』

と、また云ひました。

『では、私、手傳つて上げるわ』

『いえ、駄目よ、私は私の仲間とでなければ駄目なんです』

と、云ひました。

美ちゃんは早速、お母さんにその話しをいたしました。

お母さんはすぐ今一羽の駒鳥を買つて來て下さいました。

美ちゃんは毎日お母さんから頂いた、お菓子を駒鳥にやりました。

二羽の駒鳥は毎日せつせと、巣を拵へてゐました。

本當に巣が出來たら、姉さんは歸つて來るでせうか。

美ちゃんは巣の出來るのを樂しみにして、毎日持つてゐます。

六　太陽の望み

太郎は誰でも揶揄つて見たい癖がありました。

『あのお天道樣は、毎日威張つてゐるから、一つ揶揄つてやろう』

と、ある朝、早く起きて太陽の處へ行きました。

太陽はニコ〳〵して、

『おや、太郎さん、よく被來いました』

と、迎えてくれました。

『お天道様、私はあなたに聞きたい事があつて、やつて來ました』

『どんな事ですか』

と、太陽はニコ〳〵笑つてゐました。

『あなたは、眞赤な顔をしてゐますが、猿になりたいのでせう』

太陽は笑つてゐました。

『けれども、猿はあなたの様に丸い顔ぢやありませんよ あなたは猿になりたいのでせう』

と、申しました。

太陽は首を左右に振りました。

『あゝ、ぢや、さくらんぼになりたいんでせう、さくらんぼは赤くて圓いから、あなたはさくらんぼになりたいのでせう、けれどさくらんぼは二つつながつてゐますから駄目ですよ』

太陽は笑つてゐました。

『さうぢやないんですか、ぢや盃になりたいんでせう、圓い赤い木の盃になりたいんでせうが、盃は平らびつたいものですよ、あなたは盃になりたいんですか』

『いえ』

と、太陽はまた首を振りました、

『あゝ、利つた、あなたは走毛布になりたいのでせう、春になると田舎の人が、東京見物に來る時、肩へかけて來る赤毛布になりたいのでせう』

太陽は笑つてゐました。

『だけど、だめですよ、赤毛布は四角で二本の黒棒がありますよ、あなたは圓いから駄目ですよ、それでも赤毛布になりたいのですか』

『いえ』

と、太陽はまたこう云ひました。

『それぢや、あなたはストウブの火になりたいのですねさうでせう』

『いえ』

『ストウブの火は暖かいけれど、あなたにはなれないからね、ぢや、ぶどう酒になりたいのでせう』

と、聞きました。

『いえ』

と、また太陽は首を振りました。

『成程、ぶどう酒はコツプへ注がれると、美しいけれどあなたにはなれませんね』

『さうです』

と、太陽は云ひました。

『それぢや、あなたは梅干になりたいのでせう、梅干は赤くて圓いけれど、しなびてゐますぜ、それにすつぱいや、あなたは梅干になりたいのですか』

『いや〳〵』

と、太陽は首を振りました。

太郎はお天道様を揶揄つてやろうと思ひましたが、何を云つても首を振りますので、もう揶揄つてみやうがなくなりました。

『うん〳〵、判つた、お日様はばらの花になりたいのでせう、美しくつてやさしいばらの花になりたいのでせうね』

『いえ』

と、太陽は笑つてゐました。

『ぢや、一体あなたは何になりたいのです』

と、太郎は根まけしてしまひました。

『猿でない、盃でない、さくらんぼでもない。またストウブの火でもないし、ぶどう酒でもない。ばらの花にもなりたくなければ、一体、あなたは何んになりたくつて

毎日赤い丸い顔をしてゐるのですか』

と、聞きました。

『私はあなたの仰有る様なものにはなりたくはないのですよ、私は私で、太陽の儘で、いつまでもこうしてゐたいんですよ』

と、申しましたので、太郎はそれから少しも椰揄はなくなりました。

七　玩具の戰爭

文ちやんの家には澤山玩具がありました。

日本の玩具も西洋の玩具も、動物も軍艦も飛行機も、何んでもないものはありませんでした。

處がこの文ちやんはいたづらやさんで、そして飽きつぽい坊ちやんでありました。

『こんなもの、いらないや……』

と、云つては手をとつたり、足をもいだり、板の間へ叩

露光量違いの為重複撮影

きつけたりいたします。

その不具の玩具は、皆なお座敷の玩具箱のなかへ投げ込まれてありました。

文ちやんの妹の雪ちやんも、文ちやんに負けないいたづらやさんでした。

二人でいつも新しいお人形を買つて貰つても、ちきにこはしてしまひます。

そして、どんな事があつても、二度とそのおもちやを可愛がつてやりませんでした。

玩具たちはすつかり怒つてしまつて、何とかしなけれ

童謠

玩具の戰爭

しけを作

めなし達磨の
總大將
どつと攻め來る
玩具共。
爆彈投下の
飛行機に
文ちやん雪ちやん、
あやまつた。

露光量違いの為重複撮影

きつけたりいたします。

その不具の玩具は、皆なお座敷の玩具箱のなかへ投げ込まれてありました。

文ちやんの妹の雪ちやんも、文ちやんに負けないいたづらやさんでした。

二人でいつも新しいお人形を買つて貰つても、ちきにこはしてしまひます。

そして、どんな事があつても、二度とそのおもちやを可愛がつてやりませんでした。

玩具たちはすつかり怒つてしまつて、何とかしなけれ

童謡

玩具の戦爭

しけを作

めなし達摩の
總大將
どつと攻め來る
玩具共。
爆彈投下の
飛行機に
文ちやん雪ちやん、
あやまつた。

ば、我々の仲間はみんな不具にされてしまはなければならないと云ふので、達摩さんがある夜、お座敷へ玩具をあつめて、相談をいたしました。

『時に、諸君、今夜集つて貰つたのは他ではないが、家の坊ちやんやお嬢さんが、あまり我々を虐待するので、最う我慢が出來なくなりました』

『ひや〳〵』

と、キユーピツトが手を叩きました。

『處で、我々は今夜こゝで何とか一つ、こんな目にあはない方法を考へやうと思つて、諸君に集つて貰つたので

あります』

と、達摩はとう〳〵と演說をやりました。

『で、何うしたらいゝだらうね』

と、桃太郎が、鬼ケ島征伐した勇氣がなくなつて、こう云ひました。

『私、始めはお孃さんに、ソレは〳〵可愛がつて頂いたのよ、それだのにこんなにされて』

と、ゴム人形はポロ〳〵涙を流しました。

『私だつてね、ごらんなさい、生れた國では神樣だの、神樣のお使だのと云つて、可愛がつて下さるけれど、こ

の坊ちやんにかゝつちや、往生ですよ、裸にされて手をもがれ……』

と、キユーピツトは口惜しさに、言葉がつゞきませんでした。

『成程、俺は隨分強いと思つたが、この通りお腹を破かれて、藁が出ちやつたよ』

と、熊がのそ〳〵出て來ました。

『いや、皆さん、私はまだひどいですよ』

と、前へのり出して來たのは、浦島太郎です。

『おや、君は別に何處も怪我をしてゐないから、まアい

ゝちやないか』

と、桃太郎が羨しさうに云ひますと、

『さうちやありませんよ、私は折角貰つた玉手箱を取り上げられてしまつたので、故郷へ歸る事が出來ません』

『成程、それは氣の毒な事だ』

と、氣の弱いサンタクロースのお爺さんは同情をよせました。

『だつて、却つていゝちやないか、玉手箱なんか持つて故郷へ歸つても、箱をあければ、白い煙が出て、お爺さんにならにやならないんだから、取り上げられて却つて

幸福ぢやないかね』

と、舌切雀が申しました。

『不幸が却つて幸福になつたものさ』

と、鬼が申しました。

『だつて、私には玉手箱はつきものなんですからね』

『成程』

と、一同は申しました。

『私もひどい目にあつてゐますよ』

と、云つたのは猿でした。

『あゝ、猿さんか、お前は柿を喰べられたつて、泣いて

ゐたんだね』

『さうです』

『處で、諸君がこの通り、誰一人ひどい目にあはないのはないんだが、一つ坊ちやんやお孃さんを困らせて、改心させる方法はないだらうか』

と、議長の達摩さんが、一同を見廻しました。

一同は坊ちやんや孃ちやんの亂暴に、こりてゐますから誰も思案にあまつてゐました。

すると、猿公が膝をすゝめて、

『こりや一つ、坊ちやん孃ちやんの寢込みへ踏み込んで

キユー〳〵の目に逢はせてやつた方が、一番いゝと思ふが、何うでせう』

と、申しました。

『成程、賛成々々』

と、一同は手をパチ〳〵と叩きました。

『夜撃と云ふ奴だね』

と、陸軍大將の人形は、劒の折れたのをもつて云ひました。

『さうだ、それがいゝが、僕は困るよ』

と、云つたのは桃太郎でありました。

『何うしてだね』

と、金太郎が聞きました。

『僕は鬼ケ島征伐の時の刀を取られてしまつて、困つてゐるんだもの……』

『そんな弱虫ぢや困るぢやないか、構ふもんか、これだけの軍勢なら、二人位の敵はとつちめる事が出來るよ』

と、兎に角、攻める事に相談がきまりました。

文ちやんと、雪ちやんは、晝間の遊び疲れで、スヤスヤと眠つて居りました。

すると襖がスラリと開いて、ワツと攻めて來た桃太郎

に金太郎、ドカ〳〵と踏み込んで來て、文ちやんと雪ちやんに飛びつきました。

文ちやんも雪ちやんもおどろいて、飛び起きました。

すると、キユーピツトやゴム人形や、いろ〳〵の玩具が攻めて來ましたので、

『サア、大變だ』

と、逃げ出さうとしますと、頭の上へ飛行機が飛んで來て、爆彈を投下しました。

『あツ、助けてくれツ』

と、文ちやんと雪ちやんは、大きな聲を上げました。

と、その聲に眼がさめました。

『兄さん、夢見たの』

『あツ雪ちやんもかい』

二人はソツと玩具箱をのぞいて見ましたら、ちやんとみんな入つてゐました。

それからは、二人は大人しくなつて、どの玩具も可愛がつて、大事にしてやりました。

八　お尻の肉

ある處に義俠心に富んだ獅子が棲んで居りました。

非常にやさしくて、顔は恐しくても、本當に親切な獅子でありました。

他の獸は何か心配事があると、この獅子の處へやつて來て賴みました。

その度毎に獅子は一度も厭だと云はずに、心よく引うけてくれますので、誰もみんなこの獅子を神樣の樣に思

つて居りました。

この獅子の近所に夫婦の猿が棲んで居りました。

そして大變仲がよくつて、二疋の子供が出來ました。

猿はいつも喰物を探しに行く時は、子供を一疋づゝおぶつて出かけて行きました。

けれどもだん〳〵子供の猿も大きくなつて、とても親猿はおぶつて出かける事が出來なくなりました。

その爲めに二三日親猿は喰物を探しに出ずに、何うしたらいゝかと、相談ばかりして居りました。

そのうちに喰べものはすつかりなくなつてしまひました。

た。

『あなた、最う今日は喰べものが、なくなつてしまひましたよ』

と、妻の猿が申しました。

夫の猿は困つた顔して、

『そりや弱つたな、何とかしなくちやならないね』

『さうですよ、一日喰べなければ、死んでしまひますよ早く喰べものを探しに行かなければなりませんよ』

と、心配して云ひました。

『それは判つてゐるさ』

『そんなら、早く探して來て下さいな』
『けれども、子供を置いて行けないよ』
『成程、さうですね』
『子供ばかりの時には、どんな惡い奴が來て、喰べてしまはないとも限らないからね』
『ちや、何うしたらいゝでせう』
二疋の親猿は腕を組んで思案をしてゐました。
子供の猿はそんな事は知りませんから、
『お父ちやん、お腹がすいたよ』
『お母ちやん、お乳を頂戴』

と、泣いて云ひましたけれど、喰べないものですから、お母さんのお乳も出て來ません。
子供がキイ〳〵泣くので、ホト〳〵困り拔いて居りました。
この時フト思ひついたのは、義俠心にとんだ獅子の事でありました。
『ウン、さうだ、あの獅子さんにお願ひしやう』
と、親猿は二疋の子供をつれて、獅子の處へやつて來ました。
『獅子さん、お願ひがあつて來ました』

『何んだね、願ひと云ふのは』

と、聞きました。

『私達は今まで、喰物を探しに行く時は、この子供を一疋づゝおぶつて行きました、けれどもこんなに大きくなつては、おぶつてゆけなくなりました。と云つて家へ置いて行くと、悪い奴等が來て、子供を喰べてしまひます その爲め今日まで喰べものを探しに出ませんでしたが、もうすつかりなくなつてしまひました』

『成程、それで何うしやうと云ふんだね』

『私たちが喰ものを探して來るまで、何うか二疋の子供

を預つては下さいませんか』

『あゝ、そんな事か、お安い御用だ、置いてゆきなさいよ』

『それでは何分お願ひいたします』

と、親猿は大變喜んで、子供を獅子に預けて、喰物を探しに、山奥へ行つてしまひました。

獅子は預りものですから、子供の遊んでゐるのを、注意してお守してゐました。

すると、この時、獅子の家の前の木に、鷲が一羽飛んで來て、とまりました。

鷲も二三日喰べものがないから、探しに來たのでありました。

見ると、おいしさうな子供が二疋遊んでゐますから、

『こりや、うまいものにありついたぞ』

と、喜びましたが、獅子が皿の樣な眼をして、見張りをしてゐるものですから、鷲はちよつと手出しが出來ませんでした。

そのうちに獅子はトロ〳〵と眠つてしまひましたからしめたと思つて、鷲はその間に二疋の子供をさらつて、木の上へ止まり肉をさいて喰べやうとしました。

子供の猿達は驚いてキイ〳〵と泣き叫びますと、その聲に驚いて、獅子は眼をさましました。

これを見た獅子はびつくりして、木の處へやつて來て

『おい〳〵、子猿を喰べるのは待つてくれ、それは預りものだから、返して貰ひたい』

と、獅子はおだやかに賴みました。

『いや、これは返せないよ、俺はお腹がすいてゐるのだから、これを返す事は出來ない』

と申しました。

『ぢや、代りの肉をやるよ』

と、獅子はお尻をかいて、自分の肉をやつて、子猿を返して貰ひました。

親猿達はおいしい喰物を澤山持つて歸つて來て、この話しを聞いて涙を流してお禮を申しますと、

『なアに、俺は唯約束を守つたゞけの事さ、お禮を云ふには及ばないよ』

と、痛いお尻をなでゝゐましたとさ。

九　二つの林檎

フランスのある片田舎にジョンと云ふ十二の少年がありました。

この少年は大變な慾張りで、また我儘者でありましたので、お母さんは困つて居りました。

そして毎日遊んで居りますので、

『ジョンや、そんなに遊んでばかりゐては困るではないか、少しはお母さんのお手傳でもなさい』

と、云つてもナカ〳〵聞き入れませんでした。

そして、近所の子供が何か持つて居りますと、すぐにそれを奪ひとつてしまひます。

『ジョンさん、それは私がお父さんから、買つて頂いたものだから、返しておくれよ』

と、云ひますと、すぐに怒つてしまつて、

『嘘だい、これは私のものだい』

と、云つて、決して返しません。

仕方がありませんから、ジョンのお母さんに話しをすると、

『何とも申譯がありません』

と、お母さんは買つて返します。

あまり度々なので、お母さんも困り抜いて、神様にお願ひいたしました。

『何うか、神様、ジョンの心のなほります様に、說諭して下さいまし』

『よし〳〵、きつとなほしてやるよ』

と、神様は承知なさいました。

『お前は家へ歸つたら、ジョンを勘當してしまへ』

と、仰有いました。

お母さんは唯一人の可愛い子供ではありますけれど、神様の仰有る事であり、またジョンの心が直る事でありますから、家へ歸りますと、ジョンを勘當する事にいたしました。

『ジョンや、お前は今日限り勘當するから出ておいで』

と、お母さんは涙をこぼして申し渡しました。

『あゝ、さうですか、それは有難い事だ、毎日叱言ばかり聞くより、どんなに氣樂でいゝか知れない』

ジョンは平氣で家をとび出しました。

さてこうなると村の人たちは、ジョンをいぢめますの

で、流石のジョンも、その村にゐられなくなりました。

『なアにこの村ばかり、お天道樣が照るんぢやない、喰べものだつて、どこにもあるんだから、他の村へ行つて見やう』

と、その村を飛び出してしまひました。

野原を越え、山を越え、谷を越えて、いくら行つても〳〵も村にも里にも出ませんでした。

ジョンはすつかり疲れてしまつたし、お腹もすいてへト〳〵になつて、ある大きな杜のなかへ入つて行きました。

すると、おいしさうな林檎が澤山なつてゐましたから

『こりや、有難い』

と、傍へ走り寄つて、木へのぼらうとしました。

すると、何處からとなく、

『これ！ジョンや、この林檎は一つでも喰べてはいけないよ』

と、云ふ聲が聞えましたから、驚いて四邊を見廻しましたが、誰の姿も見えませんでした。

『なアに、構ふもんか、お腹がすいてゐるんだもの、林檎でもたべなくつちや、死にさうだ』

と、云ひ乍ら、林檎の木にのぼらうとしますと、

『これ〳〵、この林檎を喰べると、後悔するぞ』

また、こんな事が聞えて來ました。

ジョンはまたびつくりして、四邊を見廻しましたが、やつぱり姿が見えません。

『なアに、これは俺の淋檎だ、誰にも文句を云はれるものか』

と、勝手な事を云つて、木へのぼつて、二つ三つおいしさうな林檎をもいで、木からをりました。

そして木の下に腰をおろして、喰べやうとしますと、

『これ〳〵、この林檎は禁斷の實だ、お前のものぢやない、神樣のものだ、喰べると罰があたるぞ』

と、云ふ聲がまた聞えました。

けれどもうお腹がすいて、眼が廻りさうでしたから、構はずに、ガブリと林檎をかぢりました。

まア、その實のおいしいこと……頰が落ちさうでありました。

『うまい……うまい……』

と、ジョンは夢中で二つ三つ喰べました。

すると、不思議に鼻の頭がムズ〳〵して來て、見る見るうちに、すつと〳〵長くのびて來ました。

『あれ〳〵……』

と、驚いてゐるうちに、ジョンの鼻は天狗のものより、もつと〳〵長くなつて、重くつてとても起きてはゐられずに、前へのめつてしまひました。

鼻は要捨なく、ドン〳〵とのびて行きます。

この時何處から出て來ましたか、羽根の生えた可愛らしい子供が三人飛んで來て、鼻の上でダンスをやり出しました。

『……大馬鹿小馬鹿の我儘者よ、

親の意見を耳にも入れず、
人の物でも欲しがる子供、
神の怒りで鼻長小憎。
林檎ほしさに一つや二つ、
三つ四つと喰べたはよいが、
ズン〳〵のびる鼻の先。
のびれやのびれ、
天までのびれ……』
と、唄つては面白さうに踊つてゐました。
ジョンは痛いやら、苦しいやら……ボロ〳〵大きな

涙をこぼしてゐましたが、
『神様、私が悪うございました。これから心を入れかへて、親孝行をいたしますから、何うか許して下さい』
と、本當に改心して泣いてゐました。
すると、天使達は淋檎の木からか、一つの實をとつて來てくれました。
『さア、これをお喰べ』
『でも、また鼻がのびるといけませんから、もう頂きません』
『いや、もう、そんな事はないよ』

露光量違いの為重複撮影

『もとの通りになるから……』

ジョンは恐る〳〵その林檎を喰べますと、不思議や不思議……』

ジョンの鼻はもとの通りになりましたので、ジョンはすつかり改心してお母さんの許へ歸りました。

お母さんは涙を流して喜びました。

そしてジョンは生れ變つた樣に、一生懸命に働いて親孝行をいたしました。

童謠

鰒の願ひ

しげを作

羽根が生えたと
喜ぶ子鰒。
お母さんの鰒も
大威張。
空へのぼつた
馬鹿の鰒
とう〳〵鳶に
殺された。

露光量違いの為重複撮影

『もとの通りになるから……』

ジョンは恐る〳〵その林檎を喰べますと、不思議や不思議……

ジョンの鼻はもとの通りになりましたので、ジョンはすつかり改心してお母さんの許へ歸りました。

お母さんは涙を流して喜びました。

そしてジョンは生れ變つた樣に、一生懸命に働いて親孝行をいたしました。

童謠

鰒の願ひ

羽根が生えたと
喜ぶ子鰒。
お母さんの鰒も
大威張。
空へのぼつた
馬鹿の鰒
とう〳〵鳶に
殺された。

しけを作

十　河豚の願ひ

海の底に棲んでゐる鰒のお母さんが『何うかして、出世がしたい、出世がしたい』と、口癖の樣に云つて居りました。

魚仲間の連中はまた始つたと云つて、笑つて居りました。

鰒のお母さんは、神樣の處へ行つて、『何うか出世させて下さい』

と、お願ひしました。

神様はお困りになりました。

『鰒が出世しだつて、鯨になれる譯ぢやなし、本當に困つたものだ』

と、呟いて被在いましたのを、他の仲間が聞きました。

それから鰒のお母さんに逢ふと、

『鰒さん、あなたは出世がしたいんですつて、何んなふうになるんですか』

『駄目よ〳〵、鰒さんはすぐ怒つてしまふんだもの』

『あら〳〵、もう怒つてお腹をふくらませましたよ』

『そんなにお腹をふくらませると、お姫様になれませんよ』

『だつて、鰒さんは容色が悪いから、駄目ですとも』

と、皆なが揶揄ふので、鰒のお母さんはつく〳〵いやになりました

もうこんな處にはゐたくないと思ひましたので、また神様の處へ行きました。

『神様、何うか私に羽根を下さい、そうすれば後は私一人で出世をしますから』

と、お願ひしました。

神様はまた困つてしまひました。

『鰒が羽根を生やして何んになるつもりなんだろう、蝶々の一族にでもしてやろうかな』

と、つぶやいてゐました。

これを聞きつけたのは、飛の魚でありました。

早速、神様の處へ來て

『神様、御安心なさいまし、蝶々の一族になさらなくとも、仲間に私の様なものもありますから、もし鰒に羽根を下さいますれば、私達の仲間にします』

と、申し上げました。

『成程、お前は飛の魚だつたね、お前のゐる事をすつかり忘れてゐたよ、ではお前の仲間にしてやつてくれ、私は鰒の願ひを聞き達けてやるに、どんなに苦勞をしたか知れないよ』

やれ〳〵と神様はやつと安心なさいました。

鰒の願ひは半分叶ひました。

自分には羽根が生えませんでしたが、悴の小鰒に羽根が生えました。

お母さんの鰒はすつかり喜んでしまつて、小鰒を連れて歩きました。

すると魚の仲間は、皆な笑ひました。

『お鰒さんはなんて馬鹿なんだらう、あんなものをつけてもらつて不具になつてしまつた』

と、云つてゐました。

お母さんの鰒は怒つてしまつて、飛の魚の處へ來て、

『本當に皆なはひどいのよ、神樣からやつと貰つた羽根を見て、不具だなんて云つてゐるのよ』

と、泣き聲で云ひますと。

『いゝやね、他の者がなんと云つたつて、人間だつて羽根の生えたものゝ樣に、空を飛ぶ世の中だもの、云ふも

のには、云はして置くさ』

『すると私も出世したわけですね』

『さうだとも、この海のなかちや、お前さんたち親子に並ぶものはないよ』

『まア、嬉しい』

と、お母さんはすつかり喜んでしまひました。

『サア、小鰒や、あの空へ行つて、皆なを驚かしてやつておくれ』

と、申しました。

小鰒は勇み立つて、海を出て、空へ舞ひ上つて行きま

した。

すると丁度鳶がゐましたが、

『おや、變な奴が來た、殺してしまへ』

と、嘴で突き殺して、喰べてしまひました。

お母さんの鰒はこれを見て、泣き悲しみました。

『あゝ、身分不相應な望みはするものぢやない』

と、すつかり改心しました。

十一　恩知らずの兎

ある大きなお邸に、二疋の兎が飼はれてありました。

毎日々々おいしいものを喰べさせられて、呑氣な日を送つて居りました。

けれども兎たちは不平でなりませんでした。

『こんなつまらない事はありやしない、狹い檻に入れられて、子供の玩具にされて、本當につまらない』

と、こぼして居りました。

ある日、兎は他の兎に向つて、

『ね、美つちやん』

『なアに』

『私たちほど、つまらないものはないね』

『本當にさうですわ』

『あの野や山が戀しいね』

『さうですね』

『もとのお友達の處へ行きたくはありませんか』

『そりや、ゆきたいわ』

『何うかして逃げる事は出來ないでせうか』

『そりや逃げ樣と思へば、何うにでもなるぢやないの』

『そんなら、この家を出やうか』

『それがいゝわ』

と、美ちやん兎は應へましたけれど、また考へ直して

『でも正ちやん、このお邸の人達に對して濟みませんわね』

『何うして』

『長い間お世話になつたんだもの』

『だつて、誰も世話をしてくれと、頼みやしないのに、勝手に世話をするんでせう、私達には甚だ迷惑な話しち

やないか』

『だつて、毎日喰べる心配もなく、おいしいものを澤山頂いて、今日まで呑氣に暮して來たのですからね』

『そりやさうさ、だけど、いつまでもこんな事に甘えてゐては、とても出世は出來ませんよ』

と、正ちやん兎は云ひました。

『それもさうね』

と、美ちやん兎はまた賛成しました。

『美ちやんは、こゝにゐたいならゐるさ』

『正ちやんは何うするの』

『僕は何うしても逃げたいね』

『さう』

『お父さんやお母さんは心配してゐるだらうからね』

美ちやん兎はこの事を聞くと、急にお父さんやお母さんが戀しくなりました。

『お友達は面白く遊んでゐるだらうしね』

『さうですね』

美ちやん兎はお友達に逢ひたくなりました。

『僕はこの家を出て、自由な野山へ歸るつもりだ』

『ぢや私ひとりぼつちになるわ』

と、美ちやんはメソ〳〵泣き出しました。

『だからさ、それがいやなら、一緒に逃げ出さうぢやないか』

『えゝ、私さうするわ』

『きつとだね』

『えゝ』

と、淋しげに返事をしました。

『こゝのお邸に未練があるんなら、僕はすゝめやしないんだよ』

『もう、決心したわ、未練なんかないわ』

『よろしい、それぢや一緒に逃げやう』

『いつ逃げるの』

『今夜さ』

『隨分早いのね』

『善は急げと云ふからね』

相談はきまりました。

その夜二疋の兎は、お邸を逃げ出しました。

そしてピヨン〳〵ピヨンピヨコと、ある賑かな町まで逃げて來ました。

そこもやつとの事で通りすぎて、暗い野道を一生懸命

露光量違いの為重複撮影

に走つて、山へと行きかゝりました。

ある草原まで來ますと、眞暗だつたから、

『あツ』

と、云ふ間に河へ落ちて、二疋とも死んでしまひました。

翌朝、子供が河邊で二疋の兎の死體を棒で叩いてゐました。

人にうけた恩を忘れた罰でありました。

童謠

おかしな盲目

しけを作

井戸へはまつた

あんまさん

帶につかまり

引つぱられ、

身上々々と

唄つてる

おかけで金が

ふえて來た。

露光量違いの為重複撮影

に走つて、山へと行きかゝりました。

ある草原まで來ますと、眞暗だつたから、

『あツ』

と、云ふ間に河へ落ちて、二疋とも死んでしまひました。

翌朝、子供が河邊で二疋の兎の死體を棒で叩いてゐました。

人にうけた恩を忘れた罰でありました。

童謠

おかしな盲目

しけを作

井戸へはまつた

あんまさん

帶につかまり

引つぱられ、

身上々々と

唄つてる

おかけで金が

ふえて來た。

十二　おかしな盲目

安平の家は年中貧乏して、暮して居りました。けれど情深くて働きものでありました。

大晦日の夜でありました。

一人の盲目が、安平の家の前に立つて、

『今晩は……』

と、云ひますから、安平が出て來ました。

『何か用ですかね』

『はい、誠に申しかねた事ですが、何うか今夜一晩泊めて頂けませんか』

と、お願ひしました。

安平は氣の毒になつて、

『泊めて上げる事は何んでもないが、蒲團もなければ、喰べるものもありませんよ』

『いえ、もう泊めて頂けさへすれば、こんな嬉しい事はありません』

と、申しました。

『そんなら、何うか遠慮なく、家へ入つてお泊りなさいよ』

と、優しく手を引いて、家へ入れて焚火をしてやりました。

『有難うございます、あんまり寒いので凍死しさうでしたよ』

と、盲目はホク〳〵喜んで居りました。

安平夫婦は自分達の喰べる御飯を、盲目にやりました

『いえ、御飯は何うか、あなた方で召上つて下さい』

『いや、お前さんはお腹がすいてゐると、寒いもんだから、お上りなさい、私等は一度位喰べなくも大丈夫です

から』

と、無理に喰べさせました。

さて寝る時になると、安平夫婦は自分たちの蒲團を盲目に貸してやりました。

盲目は大變喜んで、

『初水は私が汲んで、縁起を祝つて上げやう』

と、思つて寝ました。

一夜明けて元日となりました。

盲目は誰よりも早く起きて、井戸へ行つて水を汲まうとして、あやまつて井戸のなかへ落ちました。

安平夫婦は驚いて、井戸の處へ飛んで來ました。

そして夫婦の帶をつなぎ合せて、井戸のなかへ入れまして、

『さア、この帶につかまつて上つて下さい』

『有難うございます』

と、盲目は禮を云つて、

『何うか、引つぱり上げる時、身上々々、身上々々と云つて下さい』

と、申しました。

安平夫婦は變な事を云ふ人だと思ひましたが、賴まれ

た事をいやだと云ふ夫婦ちやありませんから、

『身上々々、身上々々……』

と、大きな聲で、村中にひゞくかと思ふ程怒鳴り乍ら、盲目を引つぱり上げました。

すると、盲目は今一息と云ふ處で、

『身上は上つた……』

と、大きな〳〵聲で云ひました。

それから不思議に安平夫婦の家は、メキ〳〵と身代がよくなつて、村一番の大金持ちになりました。

すると安平の隣に住んでゐた掠十夫婦は、ナカ〳〵の

大金持ちで、下男下女も澤山つかつてゐましたが、この話しを聞くと、

『よし〳〵、俺の家でも大晦日の晩に盲目を泊めて、一番もつと金持ちになつてやらう』

と、慾張つた事を考へてゐました。

いよ〳〵その年の大晦日が來ました。

するとまた盲目が杖をついて、急いで來るのをみつけた掠十は、家から飛び出して、

『盲目さん、盲目さん、何うか私の家へ泊つて下さい』

と、申しました。

盲目は迷惑さうな顔をして、

『いや、折角だけれど、私には女房が待つてゐますから何うか御免をこうむります』

と、キツパリ斷りました。

『まア、いゝぢやないか、是非泊つておくれよ』

『でも、明日は正月元日の事ですから、許して下さい』

と、聞かぬのを掠十は、何んでもかんでもと、無理に家へ連れて來ました。

そしていやがるのに無理に御飯をたべさせて、寢かせました。

元旦の朝になると、盲目さんはグウ〳〵と鼾をかいてゐてナカ〳〵起きません。

『盲目さん、起きて下さい』

『いや、まだ眠いから寢てゐます』

『そんな事を云つたつて、私の家の規則で、元旦の朝はお客が若水を汲むんだから、お前さん、起きて誰よりもさきに汲んで下さい』

『でもさむいからいやです』

『そんな事を云つては困る』

と、無理に蒲團をとつて起しました。

そして井戸端へ連れてゆきました。

盲目さんは怒つてしまつて、

『そりやあんまりひどいぢやないか』

と、申しました。

『洒落なんか云はないで、早くくんでおくんなさいよ』

『寒いよ〳〵』

と、盲目はブリ〳〵怒つて、しぶ〳〵つるべをおろしかけました。

その時椋十は、盲目の後から、盲目をついて井戸へ落してしまひました。

『わア……ひどいや〳〵……』

と、盲目は大きな聲を出して泣き出しました。

椋十は、〆たと思つて、下男下女を呼び、家中總出でつなを井戸へ入れました。

『さア、つなですよ、つかまつて上つて下さい』

と、申しました。

『サア、身上だ身上だ、身上々々、身上々々』

と、國中にひゞき渡りさうな大きな聲で怒鳴り乍ら、盲目を引つぱり上げました。

今一息と云ふ處で、

『身上は下つた……』

と、盲目は申しました。

『おや〳〵、ひどい事を云ひやがるな』

と、椋十はいやな顔をしました。

それから不思議な事に、椋十の身代はだん〳〵下つて村一番の貧乏人になりました。

十三　犬の鼻

昔、三河の國に郡司までした人がありましたが、この人は姉さんと弟の二人の子供を殘して、死んでしまひました。

唯二人になつた姉弟は、金もなし賴りにする人もなく淋しく貧しく暮して居りました。

處がこの弟は我儘者で、物臭でしたから少しも働きませんでした。

姉さんは心配して、いろ〳〵と意見をしましたが、ナカ〳〵聞き入れません。

『姉さんがそんなにうるさい事を云ふのなら、私はもう姉さんの處には居りません』

と、プリ〳〵して出て行きました。

姉さんは大變悲しく思ひましたが、何うする事も出來ませんから、唯一人で白犬と共に暮してをりました。

姉さんは遊んでゐてもならないから、蠶を飼つて居りましたが、何うした事か皆な死んでしまひました。

『まア、仕方がない、來年はうまく飼ひませう』

と、その年はあきらめました。

翌年になると、また一生懸命に蠶を飼ひました。

今一息と云ふ時に、何うした事か、また皆な死んでしまひました。

『あゝ、なんと云ふ情けない事だらう』

と、姉さんは涙を流して悲しみました。

『まア、仕方がない』

と、あきらめて

『來年こそは立派にやりませう』

と、その次の年を待つて居りました。

三年目になりますと、

『サア、今年は二年分も取り返さねばならぬ』

と、夜も眠らずに、一生懸命に蠶を飼ひはじめました。

朝は早く起きて、おいしい桑の葉をとつて來ては喰べさせてゐました。

すると、ある朝、姉さんは白犬をつれて、山へ行き澤山の桑の葉をとつて來ました。

『さぞ、皆なお腹をすかして、待つてゐるでせう』

と、急いで蠶の傍へ來て見ると、唯一疋生きてゐるばかりで、他は皆なまた死んでゐました。

姉さんはすつかり落膽して、

『まア〳〵、何うして私はこんなに不運なんでせう、あゝ、神樣は私に幸福をあたへて下さらないのか知ら』

と、ホロ〳〵と涙を流して悲しみました。

『せめて一疋の蠶だけでも』

と、桑の葉を與へて、

『さア、お前さんだけだ、何うか桑の葉は澤山あるんだから、腹一杯喰べておくれ』

蠶は嬉しさうに、ムシヤ〳〵と喰べてゐました。

白犬はこの時まで、姉さんの傍でジツと、その一疋の

蠶を見つめてゐましたが、何と思つたのか、突然、とびついて、その一疋の蠶を喰べてしまひました。

これを見た姉さんはびつくりして、

『まア、お前は何んと云ふなさけない事をしておくれなのか』

と、姉さんはうらめしさうに、犬の顔を見て、ポロ〳〵と、あつい涙を流しました。

白犬は暫く口をもが〳〵させてゐました。

そして苦しさうに

『クン〳〵、クン〳〵』

と、鼻をならしました。

その度に鼻の穴から、實にきれいな絹糸が出て來ました。

『まア、これは……』

と、姉さんは吃驚してしまひました。

姉さんは急いで、グン〳〵引つぱり出しましたが、いくらも出て來ます。

そしてお家に一杯になつた頃、プツツリと糸は切れて

それつきり白犬は死んでしまひました。

姉さんは涙を流して

『有難う、お前のおかげで、一生呑氣に暮せる位の絹糸がとれました』

白犬は葬つてやりました。

サアそれが評判になつて、織つた反物は高く賣れました。

弟も改心して歸つて來て、姉弟は仲よくいつまでも、樂しく暮してゐました。

十四　笛吹少年

オランダの大きな牧場のある村に、チットと云ふ可愛らしい少年が居りました。

この子は何處から來たのか、またお父さんがあるのか死んだのか、お母さんの名前も知らない少年でありました。

『お前は誰の子だ』

と、聞きますと、ニコ〳〵笑つて

『私は神様の子です』
と、申します。
『お前は何處の者だ』
と、聞きますと、ニコ〳〵笑つて、
『私の所は世界です』
と、申します。
村の者は大變可愛がつて居りました。
少年は大きな牧場の牛の番をして居りました。
この子は大變笛が上手で、どんな遠くに居りましても
笛を吹くと、牛があつまつて來ます。

牛が喧嘩をした時に、この笛を吹くとすぐ仲直りをし
てしまひます。
また誰が腹を立つてゐても、この笛の音を聞きますと
すぐに、心持ちがなほります。
この牧場の持主が、ある日牛を殺しました。
チツトは大變悲しんでゐますと
『チツト、この牛の肉を賣つて來い』
と、云はれました。
『はい〳〵』
と、承知はしたもの、、チツトは牛の肉を持つて、賣に

露光量違いの為重複撮影

行く風をして、野原の松の木の下へ埋めてやりました。

そしてチットは牧場へ歸つて來ました。

『チット、牛の肉はすつかり賣つて來たか』

と、申しました。

チットは正直に、

『いえ』

と、首を横に振りました。

『何んだと』

主人は怒りました。

『あんまり可哀さうでしたから、葬つてやりました』

童謡

笛吹少年

しけを作

何處から來たか
笛吹少年
怒つた人は
ニコ〳〵笑ふ
喧嘩もよして
仲なほり
ほんに不思議な
笛吹少年。

露光量違いの為重複撮影

行く風をして、野原の松の木の下へ埋めてやりました。

そしてチットは牧場へ歸つて來ました。

『チット、牛の肉はすつかり賣つて來たか』

と、申しました。

チットは正直に、

『いえ』

と、首を横に振りました。

『何んだと』

主人は怒りました。

『あんまり可哀さうでしたから、葬つてやりました』

童謡

笛吹少年

しけを作

何處から來たか
笛吹少年
怒つた人は
ニコ〳〵笑ふ
喧嘩もよして
仲なほり
ほんに不思議な
笛吹少年。

と、正直に申しました。

『嘘を云へ、貴様は賣つた金を盗んだのだらう』

と、云つて大變怒りました。

『お前の様な奴は家へ置けないから出て行けッ』

と、追ひ出してしまひました。

チットは仕方がないから、笛を吹き乍ら牧場を出て行きました。

すると、澤山の牛はゾロ〳〵、ゾロ〳〵とチットの後へついて行きました。

笛の音を聞いて牧場主は怒つてゐた心が、すつかりな

ほつてしまひました。

『あゝ、可哀相な事をしてしまつた』

と、牧場主は改心をしてゐました。

あくる朝になつて、牧場へ出て見ると、牛が一疋も居りませんので、吃驚しました。

『誰だ、牛を盗んだのは』

と、怒鳴つてゐますと、村の者が通り合せて

『お前さんの處の牛は、あのチツトに連いて行つたんだよ、俺は昨日見たよ』

と、聞かせてくれました。

これを聞いた牧場主はすつかり怒つてしまつて、

『ひどい奴だ、よし、この儘にして置くものか、キツとひどい目にあはしてやる』

と、早速、王様にお目にかゝつて、この事を申しあげて

『何うか、チツトを死刑にして下さい』

と、お願ひいたしました。

王様もけしからん少年だと思ひましたから、

『すぐにチツトを捕へて來い』

と、家來に命じました。

チツトは王様の前に引き出されました。

『お前は實に怪しからん奴だ、主人の牛を盗み出すとは不埒な奴だ、最う生かして置かれん奴だから、死刑を申しつけるぞ』

チツトは覺悟してゐました。

『併し最後の望みに、唯一つ聞いてやるから、あつたら云つて見ろ』

と、王様が仰有いました。

この時白髯の老人がチツトの眼の前に現はれました。王様や他の者には老人の姿は見えませんでした。老人はチツトの耳もとへ小さな聲で、

『私はあなたに葬つて貰つた牛です、御恩返しにいゝ事を知らせて上げませう、王様に笛を吹かせて頂きなさいまし』

と、知らせてくれましたから、チツトはその事を王様に申上げました。

早速お許しが出ましたから、チツトは笛を吹きました

すると王様はチツトが不憫になりました。

『あゝ、可哀相な奴だ、助けてやりたい』

と、すつかり心が柔いで來ました。

笛の音を聞いて、牧場からついて來た牛や、鶏や犬な

どまでが、チツトの廻りへ集つて來ました。

王様はすつかり感心なすつて、

『ナカ〳〵豪い威力を持つてゐる少年だから、王子にしてやらう』

と、王様は決心して、チツトは罪をお許しになりました。

そしてチツトは王子になつて、幸福な月日を送るやうになりました。（完）

大正十二年八月十二日印刷
大正十二年八月十五日發行

童話新集
笛吹少年

（定價五十錢送料四錢）

著作者　若月賢
東京市淺草區瓦町二十四番地

發行者　中村惣次郎
東京市淺草區小島町七十三番地

印刷者　田中龜市
東京市淺草區瓦町二十四番地

發行所　中村書店
（電話淺草四九三一番
振替東京一一六一六番）

童話新集

定價一冊金五十錢　送料一冊四錢

第一編　狐の恩返し
第二編　銀色の小鳥
第三編　小猫大盡
第四編　鷄の時計
第五編　山羊のお母さん
第六編　蛙の王様
第七編　猿の醫者様
第八編　鴉のお詫び
第九編　お鶴の九官鳥
第十編　小雀三羽
第十一編　森の女神
第十二編　賢い小犬
第十三編　鸚鵡さん
第十四編　小さい林檎
第十五編　愛子さん
第十六編　お庭の柿
第十七編　あひるの大王
第十八編　キユーピーの眼玉
第十九編　梟の大臣
第二十編　おしやべり雀
第廿一編　笛吹少年
第廿二編　小鈴の唄
第廿三編　桃色のお家
第廿四編　金の小瓶

505
8

終